

1. ヒダカイワザクラ

春、北大植物園の見所のひとつに高山植物園があります。ここでは様々な高山植物が咲きます。また、非公開のバックヤードでは道内各地から集められた高山植物を鉢で栽培・保存しています。2017年度のシリーズ⑱では、本園で栽培している道内の主要4山系（大雪、日高、知床、夕張）のうち日高山系の植物について紹介します。

サクラソウ科のヒダカイワザクラ (*Primula hidakana* Miyabe et Kudô ex Nakai) は名前のとおり日高山脈の尾根や沢沿いの岩礫地に生える多年草で、漢字では日高岩桜と書きます。

5~6月に咲き、長さ5~12cmの茎の上に、周辺部が紅紫色、中心部が橙黄色または黄白色で径25mmほどの花を1~3個つけます。葉はユキワリコザクラ (*P. farinosa* L. ssp. *modesta* (Bisset et S.Moore) Pax var. *fauriei* (Franch.) Miyabe) とは異なり少数で、長さ3~17cmの柄があり、葉身は円形または腎円形でやや厚く艶があります。葉長1.5~4.5cm、幅2.0~5.5cmで浅く7裂し、不揃いな歯牙があり、表はほとんど無毛で縁と裏面脈上に白色の毛があります。

実際に山でご覧になるには、春先のアポイ岳の上部がおすすめです。この時期のアポイ岳には同じサクラソウ科のサマニユキワリ (*P. farinosa* L. ssp. *modesta* (Bisset et S.Moore) Pax var. *samanimontana* (Tatew.) T.Yamaz.) も咲いています。サマニユキワリは花をたくさん付け葉の形も異なります。またサマニユキワリは、お花畑のような場所に自生する種であるのに対し、本種は岩陰でひっそりと咲くため、容易に区別できます。

本園では開花期に高山植物園東側の展示棚にて展示する予定です。園内でも比較的早く雪が解ける場所にあるため、4月29日の開園を待たずに咲き終わることもあります。冬季開園中に開花した場合、温室周辺の棚で見ることが出来ます。

なお通常、「植物園だより」では命名者名は記していませんが、今回は本園の初代園長である宮部金吾が命名した植物であるため、命名者名も記しました。



ヒダカイワザクラ (*P. hidakana*)

2. エゾコウゾリナ

キク科のエゾコウゾリナ (*Hypochaeris crepidioides* (Miyabe et Kudô) Tatew. et Kitam.) は、アポイ岳を中心に海拔 500m 以上の蛇紋岩質の草地に多く自生する多年草です。

自生地では 6~7 月頃に、高さ 10~40cm ほどの花茎に径 3~4cm の黄色い花を上向きにつけます。茎頂に頭状花^{とうじょうか}を 1 個つけますが、まれに茎が枝分かれして複数の頭状花をつけることがあります。頭状花の基部は径 2.5~6mm と太く、黒い剛毛が密生しています。根出葉^{こんしゅつよう}はロゼット状、長さ 6~16cm の幅広い倒披針形^{とうひしんけい}で、不整の歯牙^{しが}があります。上部の葉は長い楕円形で、葉の基部で茎を抱いており、枚数は少ないです。漢字では蝦夷顔刺菜と書き、これは茎に黒く硬い毛があるため髪剃り（こうぞり）からきています。

エゾコウゾリナ属 (*Hypochaeris*) は、日本にはエゾコウゾリナ 1 種のみが自生していますが、外来種にはブタナ (*H. radicata* L.) やヒメブタナ (*H. glabra* L.) など数種があります。

本園では、6 月頃に咲き、高山植物園東側の展示棚で展示しています。鉢物で管理する場合、1~2 年ごとに、雪解け後から 6 月終わりまでに植え替えるのが理想ですが、本種は比較的丈夫な種であるため、本園では、4~5 年に一度、時期も遅くなって 8 月に植え替えることもあります。また自生地の土壌は蛇紋岩質ですが、火山礫と腐葉土を混ぜたシンプルな用土で栽培しています。本種は、高山植物園にも植栽されています。

本種は、初代園長の宮部金吾により *Picris crepidioides* Miyabe et Kudo の学名で発表されましたが、後に上記の学名に改められました。



エゾコウゾリナ (*H. crepidioides*)

北海道大学北方生物園フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/>

参考：『北海道の高山植物』（原秀雄 1976）ほか

3. ヒダカミネヤナギ

ヤナギ科のヒダカミネヤナギ (*Salix hidakamontana*) は、日高山系、大雪山系、夕張山系の高山の岩礫地や草地に分布する固有種です。

高さ 10~20cm ほどの落葉小低木で幹の太さは 2.5cm くらいになります。枝は這うようにして広がり、若い小枝には絹毛がありますが後に無くなります。葉は表面が緑色で裏面が粉白色を帯びており、長さ 2~4cm、幅 1.5~3.5cm で円形や楕円形で互生、はっきりとした葉脈が網状に隆起しています。また葉の縁には波状の低い鋸歯があります。6~7月頃に長さ 2~5cm、太さ 1cm ほどの花穂をつけますが、緑色のため目立たなく、注視しないと見逃してしまいます。

利尻、礼文、大雪山系、夕張山系に自生するエゾノタカネヤナギ (*S. yezoalpina*) とよく似ていますが、葉脈が凹状になっているため異なる種とされています。ヒダカミネヤナギは若干小型であるため、風衝地に適した生態型とも言われています。また、近縁種として本州の南北アルプスの高山帯にレンゲイワヤナギ (*S. nakamuraana*) が自生しています。

本園での開花は7月頃です。高山植物園の通路から 1m ほど離れた所に植栽されているので、どれほど目立たない花か、立ち止まって確認してみてください。また鉢植えした株を高山植物園東側の展示棚で展示しています。

本種は、前述したように自生地では枝が這うように広がりますが、本園では枝先が空に向かって立ち上がり、高さ 40cm ほどになっています。これは、高山とは異なる札幌の気候が影響しているのかもしれませんが。本種に限らず高山の厳しい環境を耐え抜きながら生育している植物を現地より温暖な平地で栽培すると、野生株より大きくなるなどの変化が見られる傾向があります。



ヒダカミネヤナギ (*S. hidakamontana*)

4. エゾトウウチソウ

バラ科ワレモコウ属のエゾトウウチソウ (*Sanguisorba japonensis*) は、日高山脈の固有種で、岩地、とくに溪谷沿いに生育する多年草です。

草丈は40～80cm ときには1mにも達します。葉は4～6対と先端に1枚の小葉からなる奇数羽状複葉で、根際から出る葉には長い葉柄があります。小葉は長さ3～6cm、幅1.5～3.5cmで長楕円形～卵状長楕円形をしていて、葉の縁には粗い鋸歯があります。葉の裏は少し白っぽくなっていて小葉の葉柄は3～7mmほどあります。茎の上部に長さ5～20cmの長い穂に径6mmほどの花を多数つけます。花穂全体が紫紅色の太い紐状になっていて、下から順に開花していきます。花弁はなく4枚のがく片があり、花から長さ7～10mmほどの雄しべが4本突き出しています。漢字では、蝦夷唐打草と書き、北海道産のトウウチソウという意味です。唐打は中国では組紐のことを言い、この組紐の色感と花穂の印象が似ていたためトウウチソウと名付けられました。花穂は、本州中部地方の高山や亜高山の草原に自生するカライトソウ (*S. hakusanensis*) とよく似ています。

エゾトウウチソウは、高山植物園や草本分科園で8～9月頃、花を楽しむことが出来ます。日高山脈の固有種ですが栽培時、あまり土壌を選ばない種と言えます。根茎は太く堅くなり湾曲することから、鉢植えより地植えで栽培すると植物体も大きくなり花数も増え、長く花を楽しむことが出来るでしょう。草本分科園では本種と同属のチシマワレモコウ (*S. tenuifolia* var. *grandiflora*) とナガボノシロワレモコウ (*S. tenuifolia* var. *tenuifolia*) を並べて展示しています。本種は紫紅色、後者2種は白色の花でほぼ同じ時期に花を見ることが出来ます。



エゾトウウチソウ (*S. japonensis*)

5. アポイカンバ

カバノキ科のアポイカンバ (*Betula apoiensis*) は、アポイ岳の固有種で、標高 600~700m 付近の尾根沿いの斜面に生育します。高さ 1 m ほどになる落葉低木で 5 月頃に花が咲きます。枝はよく分枝し這うように広がり、若い時は短毛がありますが、後に無毛になり、古い枝はやや光沢のある黒褐色で灰褐色の皮目があります。葉は長さ 1.5~4cm、幅 1~3cm の卵形または広卵形で、表面が濃緑色、裏面は淡色、縁には不揃いな鋸歯があり、互生します。若い葉の裏面には絹毛がありますが、後に脈の上を残し無くなります。7~8 月頃に熟す果穂は長さ 1~3cm、径 6~12mm の球形または円柱形で直立します。

アポイカンバはダケカンバ (*B. ermanii*) とヤチカンバ (*B. ovalifolia*) の雑種により起源したとされています。これは DNA を用いた研究から明らかになっており、ヤチカンバの生育地にダケカンバが分布を広げたことで生じたと考えられています。高山性のダケカンバと湿地性のヤチカンバに由来する遺伝子の組み合わせによってアポイ岳の特殊な環境に適応した種になったのかもしれませんが。

アポイカンバの花は本園では 5 月頃、高山植物園で見ることが出来ます。しかしながら、植栽されているところが通路から 1 m ほど離れていることや、花が地味なため、同じ時期に咲く様々な高山植物のほうが目立ってしまい、気づかない人がほとんどです。

アポイカンバの親種とされるダケカンバが高山植物園西側の通路脇に、ヤチカンバは灌木園に植栽されています。ともに近くで見ることが出来るのでぜひ足を止めて観察してみてください。



アポイカンバ (*B. apoiensis*)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/>

参考：『雑種に起源する固有種：アポイカンバと北海道アポイ岳の高山植生の衰退』（永光輝義 2008 生物科学）ほか

6. ヒダカミセバヤ

ベンケイソウ科のヒダカミセバヤ (*Hylotelephium cauticola*) は、日高～釧路地方の海岸岸壁やアポイ岳上部に自生する多年草です。花茎は長さ10～15cmくらいで斜上または垂れ下がります。葉は長さ10～25mm、幅7～20mmで卵円形または楕円形、長さ2～7mmの柄があり、対生します。葉は粉色を帯び、縁には少数の波状の鋸歯があります。8～9月頃、濃紅色の5枚の花弁を星形に広げた花が密に咲きます。ヒダカミセバヤは様似町や襟裳岬周辺の海岸線の岩場で見ることが出来ます。また、晩秋になると紅葉し、時には岩場一面をピンク色に染めることもあります。アポイ岳からは狭葉型のアポイミセバヤが記載されていますが、最近ではその数が減少しています。

ヒダカミセバヤは多肉植物です。多肉植物というとサボテンをイメージする人が多いと思います。しかし、多肉植物は葉や茎に水分を貯め込む性質をもった植物の総称であり、サボテン科以外の植物も含まれます。

ヒダカミセバヤは、本園では高山植物園と高山植物園東側の展示棚で見ることが出来ます。本種の根茎は細くよく分岐するので、横に広がり増えていきます。そのため、地植えの栽培では、10年以上は植え替えなくても子株を増やしながら、毎年多数の花をつけます。一方、鉢植えでは数年に一度は植え替えないと次第に衰え株が減ってしまいます。それでも他の山野草に比べると植え替え頻度は少なくて済み、また病害虫にも強いので比較的栽培しやすい種です。

早い年では10月下旬頃から紅葉し始めるので、蕾が色づき始めた頃から晩秋までの長い期間、花と紅葉を楽しめます。また、ヒダカミセバヤと同じベンケイソウ科の多肉植物のイワベンケイ (*Rhodiola rosea*) とエゾノキリンソウ (*Phedimus kamtschaticus*) も展示しています。



ヒダカミセバヤ (*H. cauticola*)